
銀色カラス

紺とすん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色カラス

【Nコード】

N2846Z

【作者名】

紺とすん

【あらすじ】

呼ばれた気がして振り返ると、黒い瞳のその人がいた。初めて彼に出会ったのは、まだ二人とも幼かった雨の日。あとき、彼はわたしを全力で睨んでいた。

王宮で見習い職についたティリアのあれこれ。更新はゆっくりめの予定です。

出会い(1)

コツ、コツ、コツ・・・と、規則正しい靴音がかすかに響く。

この靴音にいつも最初に気付くのは、その少年だった。しかし彼は、今にも出迎えに飛び出したい気持ちを抑えて、その人の姿に気付いた他の子どもたちが走り出すのを横目で眺める。

大半の子どもたちが駆けつけてその騎士様を取り囲んだころ、にぎやかな人の輪に後ろからおずおずと近付く。

そして憧れをのせた黒い瞳で、その姿を熱心に眺めるのだ。

少年はシューと呼ばれていた。この養育院にあずけられたとき、一番最初に発したことに満たない音が「シュー」だったからだという。

しかし、実際にシューという音のつらなりが聞かれる機会はほとんどなかった。院長先生にも他の職員にも、自分の姿は目に見えていないのではないかと少年が思うほど、その名前のようなものが呼ばれることはなかったからだ。そこにいるのにいないのと同じように扱われる、それが養育院での少年の日常だった。

大人たちのそういった態度はごく自然に、子どもたちにも波及していた。黒い瞳という少年の珍しい特徴は、からかわれるのに十分な特質である。しかし、ほとんどの場合、子どもたちはからかうよりも、少年をとるに足らない存在として扱う方を選んだ。少年のパンが消えたり、割らなければならぬ薪の量が倍に増えたりといっ

たことはよくあったが、彼はそんな状況をただ黙って受け入れていた。

そんなわけで、少年はぽつんと一人でいることが多かった。一人でいても、大きな声で自慢話をする他の子どもの声は自然と耳に入ってくる。

養育院での一番の自慢話といえば、面会に関わる話と決まっている。自分を名指して面会にくる人がいるということ・・・それ以上に羨まれる話はなかった。

面会の機会があったということは、その子どもを養育院の外の世界に連れ出そうと考えている見知らぬ誰かがいるか、それでなければ身内が存在するということだ。

誰かにもらわれて養育院を出ていったとしても、その先にあるのが天国とはかぎらない・・・それは子どもたちのうちでも暗黙の了解だった。それでも面会を申し込まれることは喜び以外の何物でもなかったし、ましてや身内が面会に来るなどということは、大半の子どもにとって夢のような出来事だった。

ただの一度も、少年は面会というものを経験したことはなかった。漏れ聞こえてくる自慢話によれば、「母さん」というものは、自分の家族だけのためにおいしいスープを作ってくれたり、子どもを抱きしめてくれたりするらしい。「父さん」というものは、酒を飲むと子どもを殴るが、普段はたのもしく、肩車をしてくれたり、石投げを教えてくれたりするらしい。

自分に「母さん」や「父さん」がいるということ、その人たちにとって自分が確実に目に見える存在であること。それってどういう気分がするんだろう、と少年は想像してみる。

しかしその想像はいつも、甘く幸せな像を結びそうになる直前で、かき消えてしまうのだった。

「シユー」

誰かの声がそう言ったとき、少年はすぐには自分が呼ばれたのだと気付かなかった。あまりに久しぶりだったから。

その声には叱責の口調が感じられたが、自分が呼ばれたということが嬉しくて、彼はあやうく微笑んでしまつところだった。しかし、どうやら自分を呼んだのは院長先生で、呼ばれたのは今まさにスーブをこぼしたためらしかつた。

スーブは隣りに座っていた子どもも肘があたつてこぼれたもので、少年が悪いわけではない。しかし、もちろんそんなことを説明するつもりはなかつた。

普段目立たない少年が叱責されそうだという期待が、他の子どもたちの顔を輝かせている。

「そのスーブは、特別に寄付された材料を使って作られたものです。ですからあなたは、罰を受けなければなりません。もちろん、それほど厳しい罰ではありませんが。とにかく、食事が済んだら院長室に来るように」

自分におばあさんというものがいたら、あんな感じだろうか。少年がそういう印象を抱いていた院長先生は静かにそう言つと、何事もなかつたかのように、背を向けて立ち去つた。

少なくとも少年の記憶にある限りでは、院長室に入るのはそれが初めてだった。

少年が院長室に入って緊張した面持ちで扉をしめると、窓のそばに立って外を眺めていた院長先生がゆっくりと振り向いた。しかし少年の顔を見ることはせず、少年が背にしている扉に向かって話しかけるように口を開いた。

「罰として、あなたには重い荷物を運ぶ手伝いをしてもらいます。」

実際には、ある方の指示に従って作業することになります。ただし他の子どもたちには、罰として手伝いをするということ以外、何も言っただけではありません。わかりましたか」

「はい」

「その作業は、あさつての朝食後になる予定です。私がお方の元へあなたを連れていきますから、身支度は特に清潔に整えておくように」

そう言うてから一瞬だけ少年の様子を目にとめた院長先生は、少しだけ口元をゆるめて付け足した。

「難しい仕事でも危険な仕事でもないはずですから、心配する必要はありません。でも、もしも何かを期待しているとしたら・・・これはただの罰だということを忘れてはなりません」

院長室を出た少年の胸のうちは、今までにないほど波立っていた。

特別な材料だとかなんとか院長先生は言うていたが、スープをこぼすなんて珍しくもないことだ。それに対する罰の中身がこんなことってというのは、妙な話じゃないだろうか。もしかして、これは面会のようなものでないのか・・・そんな淡い期待が少年の心に浮かんだ途端の、まるでそれを見透かしたかのような院長先生のことばだった。

いずれにしろ、自分だけが特別な仕事をさせられるというのは、少年にとって初めてのことで、作業当日までの二晩を少年がよく眠れないままに過ごしたのも、無理のない話だった。

作業当日の朝、緊張のあまり少年は、満足に朝食をとることもできなかつた。前日の夜に何度も形を整え直してから寝押ししておいたシャツとズボンを身につけ、アッシュグレイの髪の毛もブラシで梳かした。

いよいよ院長先生について養育院を出発する。院長先生は歩いている間、ずっと無言だった。しばらく歩いて人気のない道に入ったとき、少年の目は、道の向こうの木の下にたたずむ人影をとらえた。その人影がまだ小さいうちから、少年は気付いていた。あの騎士様だ、と。

この一年ほど、ときどき養育院を訪れては、外の風を運んできてくれる人。ときには子ども二人を肩にのせ、あるいは泣いてる子どもをなぐさめ、穏やかな声で物語を聞かせてくれる、皆の憧れの金の髪の騎士様。

生来のものか、環境がそうさせたのか、少年の眼は、人がつい見落としてしまうようなことまで拾ってしまう。だから、立派な騎士服が見かけ倒しでないことも、ふと見え隠れする鋭い視線や身のこなしから、子ども心になんとなく分かっていた。

その騎士様が道の先に立ってこちらを見ていた。自分が手伝う予定の「ある方」っていうのはもしかして・・・神様どうか、お願いです！ 少年は心の中で祈った。

院長先生と騎士様が無言で礼をし合ってから、院長先生が少年の肩を騎士様の方に押し出した。少年は自分の願いがかなえられたことを知った。

出会い(2)

「そんなに固くならなくて大丈夫だよ。今日はわざわざ悪かったね」
騎士様が自分だけに向かって話しかけてくれている。しかし悪かったとはどういう意味か。少年は返事をする事もできず、ただ騎士様を見上げていた。

「ではそろそろ出発しようか」

騎士様はそう言っただけで歩きだしてしまった。少年はあわてて声をかける。

「騎士様、ぼくが運ぶ荷物というのは、どれでしょうか」

「荷物？ ああ、荷物か。ちょっと忘れてしまったんだ。だが、帰りはちゃんと荷物があるから大丈夫だよ。そうだ、これを持ってもらえると助かるな」

そう言うのと騎士様は肩にかけていたマントを無造作に外して、少年に渡した。

騎士様のマント！ そんな大事なものを自分が持つなんて、とにかく汚さないように、しわなどつくらないようにと、少年はマントをたたむとしゃちほこばって掲げ持った。

そんな様子を見ていた騎士様が言う。

「それからね。騎士様っていう呼ばれ方は苦手なんだ。そうだな、単純におじさんとも呼んでくれないかな。二人だけのときはね」

啞然として固まる少年の肩を上げますように軽くたたいて、騎士様はまた歩きだした。その後ぎくしゃくと歩く少年が続く。

ぐーきゅるるーぐきゃー

突然なりひびいたのは、少年の腹の虫。緊張のあまり朝食を食べられなかっただけでなく、昨晚もパンを誰かにとられて、満足な量

の食事をしていなかった。

「もしかして、院ではちゃんと食べさせてもらってないのか？」

急に顔から表情をなくした騎士様に聞かれて、少年は大きく首を横にふった。

「違います。たまたまです」

今朝は食欲がなくて、ということばを少年は飲み込んだ。体調が悪くなら帰れと言われることが怖かった。

「そうか。それならいいんだが。他に何か困っていることはないかな？」

困っていること？ それはどういう意味だろう。

今までそんなことを誰かに聞かれたことがなかった少年は、ほとんど途方に暮れる思いだった。

「今は食べるものを持っていないんだ。私も気がきかないね。でももう少し歩いたら、秘密の木があるんだよ。ちよつと取りずらい場所だけど、うまい果物がなっている」

騎士様は楽しそうに言うと、脇道に入ってしまった。そのうちに、急勾配の獣道のような道行になっていったが、騎士様は軽々と足を進める。少年もマントのしわを気にするのはやめて、負けじとついていったが、さすがに少しずつ距離が開いていった。気付けば騎士様は、だいぶ先の一本の木のそばに立っている。ようやく少年が追いつくと、その手からマントを引き取って言った。

「よくがんばったね。この道を歩くのはなかなかたいへんだっただろう？ さて、がんばりついでに、あそこの実をとってきてくれなかな」

騎士様が指さす方を見てみると、確かに木の上の方の枝に、林檎に似た木の実がいくつかなっている。

「わかりました。とってきます」

少年は張り切って木登りをはじめた。養育院でも木登りはしていたし、他の子どもよりはそれが得意だという自負もあった。だからといって、こんなに高い木の、細い枝になっている木の実を取った

ことなどなかったのだが。

ひとつめの実には比較的容易に手がとどきそうだった。しかし、下から見たときはわからなかったが、大きく鳥がかじった跡があった。その実を取るのはやめて、さらに上によじのぼり、枝に体をあずける。うつすらと赤い実に手を伸ばしてもぎりとりと、「落とし」と騎士様が言う。落としした実を騎士様が受け取るのを見て、さらに張り切って次の実をめざした。枝に腹ばいになるようにして息をとめ、手をめいっぱい伸ばす。届いた！

指先からにじりよるようにその実をつかんでもぎりとりと、また下に落とす。

「降りておいで」

もう一つとろうとしていた少年は、その声を聞いてじりじりと後ずさりして幹までもどった。高揚した気分で降りはじめた少年は、次の瞬間に体がふつと浮いたのを感じて・・・頭が真っ白になった。次に気が付いたとき、少年は騎士様に抱きとめられた形になっていた。木から落ちた自分を受けとめてくれたんだと頭が理解すると、今度は顔色を青くした。

騎士様はゆっくりと少年を地面に下ろすと、かがんで少年と目を合わせた。

「だいじょうぶかい？ 舌をかんだりしていないか」

「騎士様、も、申し訳ありません！」

「だいじょうぶみたいだね。いいかい、木登りっていうのは、降りるときの方が注意が必要なんだ。そういう話は誰かに聞いたことがなかったかな？ 木登りにかぎらず、なんでも気を抜いたときが一番危ない。きみならなんとなくその意味がわかるだろう？」

騎士様は少年の頭に手をのせるとことばを続けた。

「試したわけではないんだが、最初の穴あきの実だけであきらめて戻ってきて、仕方がないだろうと思っていたんだ。でも、さすがだね」

そう言った騎士様の目が少し潤んでいる気がして、少年は胸をつ

かれる思いがした。

「ところで、さっきは呼び方を間違えていたよ。さて、おじさんと一つずつ食べようか。それとも二つとも食べるかい？」

木の根元に二人並んで腰を下ろして、一緒に木の実を頬張った。

正直言つて味などよくわからなかったが、少年はこの日のことをずっと忘れないだろうと思った。食べ終わったときに残った黒い種を、記念にこっそりポケットにしまった。

それから太陽が真上にくるころまで歩いて着いたのは、炭焼き小屋だった。そこで昼食がわりにもらったパンを食べると、あとは木炭を受け取って帰るだけだった。

もつと何か特別で重いものを運ぶのではないかと思っていた少年は、持ち帰るのが何の変哲もない木炭だったことに拍子抜けした。

騎士様の方はそんな少年の思いに頓着することなく、帰る道すがら少年にあれこれと話しかけては、その答えにふむふむと頷いたり、あるいは驚いたりしているようだった。

それまで少年が自分の方から話しかけることはほとんどなかったのだが、朝に落ち合った場所が近付いてきたころ、勇気をふりしぼって少年は聞いてみた。どうしたら騎士になれるのですか、と。

「騎士になりたいのかい？」

足をとめた騎士様が問い返す。

「・・・」

なりたいとはつきり言えるほど、少年は自分の境遇を楽観視しているわけではなかった。もしもなれるのであれば、どんな試練にも耐えることができるだろうと思ってはいたが。

「私はね、実はけっこう弱虫だから、本当は騎士には向いていないんだ。だから、私が尊敬していたある騎士のことを伝えよう。彼はずばらしく優秀な騎士だった。技も、心根もね。あるときどうしたら彼のようにになれるのかと見習いが聞いた。彼は、まずは心を落ち着けること、そしてよく観察することだと言っていたよ」

食い入るように自分を見つめる少年に向かってうなづくことばをつなく。

「その二つは、どんな境遇にあっても訓練できることだろう？ た
たとえば鳥がある方向に飛び立つ前に、必ず何かしらの前触れが見ら
れるはずだ」

そのとき少年から体一つ分離れたあたりからバサバサツという音
がして、まっ黒な鳥が飛び立った。カラスだ。

「カラスは嫌いかい？」

少年の黒い瞳やアツシユグレイの髪は、見ず知らずの大人からカ
ラスのようだと揶揄されることがよくあった。もちろん、カラスを
良い意味で比喩に使う人などいない。しかし、少年はカラスが嫌い
ではなかった。きれいな鳥だと思ったことすらあった。

「いいえ」

「そうか。よかった。彼もカラスが好きだったようだよ」

騎士様は微笑むと会話を切り上げて、歩きだした。道の先に、二
人を待っている院長先生の姿が小さく見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2846z/>

銀色カラス

2011年12月17日00時51分発行